



発行元：株式会社サポート・ワン・サービス  
愛知県津島市愛宕町四丁目113 〒496-0036  
代表TEL：(0567) 26-3921  
FAX：(0567) 26-3922  
ホームページ <http://www.s-o-s.co.jp>

《ワクワク！/サポート・ワン・サービス》

5月のある日、ナイス・デイのフロアに暗幕やスクリーンが運び込まれた。利用者さん達もナイス・キッズの子ども達も「何が始まるの？」と興味深げ。室内が暗くなる。いつも過ごしているフロアとは違った雰囲気…。

利用者さん達が、息を飲む程ドキドキしているのが分かる。一緒に並んで座る子供達と同じように、大きく開いた目はキラキラ輝く。暗さにビックリし思わず立ち上がった人も、夜と思ひ(?)落ち着いて目を閉じている人もいる。

やがて、影絵が始まった。口を開けたままの人、微動だにせず見入る人…皆が普段と違う表情になる。いつもと違う出来事に、笑ったり、泣いたり、ドキドキ・ワクワクしたり…その感動が明日への元気になるはず！



《看護師コーナー/バイタルサインの一つ、呼吸についてパート1:呼吸数》

こんな言葉のやりとりがあった。私:「呼吸数を計っておいて」。スタッフ:「……?呼吸数?どうやって計るの?」。思わず、その質問の意味を考える…そうか、呼吸に対する意識ってそういうものなのか。そこで呼吸数を計る方法をいくつか説明したことがある。今、スタッフは呼吸数を計れるようになり、記録をしてくれている。

看護をしていく中で、何をすることもその根拠を常に考える必要があり、そのためにも正確な情報が必要になる。例えば、よくある報告。「苦しいって言うので入浴はやめました」。これで許されるなら、介護や看護って何?と言いたい。この「苦しい」は主観的情報であり、その主観的情報に客観的情報を加える必要があり、前後の様子などトータルして見る事が看護・介護のプロとして求められる能力である。入浴の技術・方法に問題はないかを把握するためにも、呼吸器疾患がある人に対しては特に入浴前後の呼吸数を計ることを伝えている。そのようにして技術や方法の改善にもつなげる。自分の技術や方法を見直すことって意外に難しい。主観的情報しか見なければ、根拠のある評価もできない。どれだけの負担を与えているのか、それを数字としても知ることは(数字だけではないけれど)衝撃的。心疾患や呼吸器疾患を持っている方が多い中、呼吸数を意識することも加わることで色々な発見ができるのだ。本人が意識していない物を意識されないように観察する目、これぞ眼力!を磨こうとする態度が大切!スタッフ一人一人の成長を願う。(T)

《一瞬かもしれないけど…/ナイス・ホーム》

現在、朝・夕の訪問提供時間は各訪問1回10分~15分程度が多くなっています。

毎朝、ガラガラと玄関を開け、『おはよ~!きのうはちゃんと寝れたあ~?朝ご飯は食べたあ~?』と声を掛けながら上がり込みます。様子が分かる『じゃ、また夕方ね。』『じゃあ、また夕方な。』と短い会話を交わし、次のお宅へ急ぎます。そして次のお宅でも「おはよ~…」が始まる。夕方も同様です。

調子が良いと、『今日はあんたら来る前にもうご飯たべたよー』と得意げな笑顔が見られることも楽しみのひとつ。毎日交わされる朝・夕の何気ない一瞬ですが、家族のような身近な関わりができつつあるのかも…と、勝手に嬉しく思っています。



《食べる/愛宕の家》

Sさんの食べる量が減ってきている。まるで食べることを忘れてしまったかのように、口を開かない日もある。食いしん坊だったSさんの面影が薄らぎつつある。

食べられる時とそうでない時の波がある。食べた時にはきちんと飲み込めたかの確認、食べられない時には無理に勧めない判断、必要な栄養や水分が取れているかの確認…。どれもがSさんにとって、大切なこと。

「おはよう~」朝、Sさんの口に、ご飯を運ぶ。久しぶりにSさんの食べる意欲を感じた!スタッフも思わず一緒に大きく口が開く(笑)

Sさんが食べてくれると嬉しい!

《入浴③~個浴だからこそ~/ナイス・デイ》

「わしはよお、じい様を見送るまで頑張らなあいかんでよお」とお湯に浸かりながらSさんは話す。浴槽のそばにしゃがんだスタッフは「そうだよ。長生きしなきゃ。おじいさんを残していったらいかんよお。」と返す。2人だけの静かな会話が交わされるお風呂の場面。

サポート・ワン・サービスのお風呂は全て個浴(1人用の浴槽で、1人で入浴する)だ。定員が10名とは言え、デイサービスは集団の場。そんな中で、お風呂は集団から少し離れることのできる空間と言える。

個浴だから利用者さんとスタッフは1対1で関わる。他の人に気兼ねすることなく話せるから、スタッフ相手に利用者さんの本音がポロリと出ることもある。反対に、利用者さんが聞き役になってくれることもある。そんな時、人生の先輩として重みのある言葉が返ってくる。

利用者さんとじっくり向き合うことが出来るから、「入浴介助が好き」と話すスタッフが沢山いる。



《古い姿から学ぶ ~日常生活 ~ 愛宕の家の日々より》

パンツ事件…発生。Mさんの名前がしっかりと書いてあるパンツ。可愛いお花が付いている。先日、洗濯物を畳んでMさんへ渡した。ところが、『汚れがとれていない。大きな茶色の染みがついている。なんでなの?誰にはかせたの?何の染み?』とMさんが驚きと怒りでびくびくした顔をして伝えにきた。

確認。どう見ても、普通に洗濯するだけではとれない汚れがあった。スタッフも訳が分からない??どうしても腑に落ちなかったスタッフが持ち帰り、漂白と洗濯を繰り返してみた。そして、意外なことに気が付いた。漂白で薄くなったMさんの名前、その下から違う人の名前が出てきた。よくみたら男性物。しかも、空いていたはずの前の部分は丁寧に手縫いで縫合させてあった。……事の流れを確認しながら整理した。

Mさんは渡された衣類の中に味気のない肌着を見つけた。裁縫が得意なので、思わずお花の刺繍をした。分からないことは、ふたつ。誰がMさんの名前を書いたのか。誰が空いている前の部分(男物なので…)を丁寧に縫い合わせたのか。誰に聞いても手は拳がらず、未だに、未解決。なんで、こんなことになったのか。

入居者の洗濯物を洗い、乾燥させて畳んで仕舞うのはスタッフ。毎日のように洗濯をすることで、いつの間にか記名が薄れ、誰の物なのか分からなくなってしまうことがある。だからといってスタッフが大きな字で違う人の名前を書き、男物の前空きを縫い合わせるなんて……そんな事があり得るのか。

入居者の老いが進んでいくにつけ、日常生活の中に、今までは想像もできなかったような出来事が起こっている。その度に、入居者の気持ちや状態の変化を、私たちがきちんと把握しながら対応することを求められているのだと感じさせられる。パンツはきれいになり、前の部分も開放され、男性の元へと戻っていった。(I)

《どこが痛い?/訪問》

昨日まで元気の良かったCさんが「痛い~」とベッドからなかなか起き上がれない。見た目には分からないが、どうやら足が痛いらしい。どうしたのだろうか…?

その後も「痛い」は治まらず、いつもの元気なCさんとはどこか違う。訪問する度に、「どこが痛い?」と聞いても、「頭が痛い」「いや腰だ」と痛い場所がコロコロ変わる。一体どこが痛いやら…と思えてくる。

『痛い』と聞いて2日後、左太ももに内出血と腫れが見つかった。「ここだったのね!」でも、打ったのか、転んだのか、Cさんに聞いても分からないまま。

痛みや苦しみをうまく伝えられない認知症の人は案外多い。ヘルパーはその人の様子から、言葉にならない訴えを受け止めたいと思う。しかし、なかなかうまくキャッチすることが出来ず、もどかしさを感じることも多い。

奥が深い仕事だ…。

《編集後記》

Nさんの訪問サービス中、ご近所さんが訪ねてきた。「Nさんのご主人の姿をここ2日見ていないから」と様子を見に来られたのだ。ご夫婦二人暮らし、加えてNさんを介護しているご主人の頑張りを知っているからこそ、心配して来てくれたのだと察した。喋れないNさんに代わり、ご主人は元気で外出中だと伝え、その人は「安心したよ」と言葉を残して帰られた。Nさんご夫婦に限らず高齢者だけの世帯は少なくない。地域で支えあうと言うと大げさかも知れないが、こんなご近所付き合いがあればちょっと心強いと思った。(M)

《宿題終わったよお~/キッズ》

毎日、学校が終わり、子供達がナイス・キッズにやって来る。1番にすることは『宿題』

4月の頃は「まずは宿題やってよお~!」と言わなければ、すぐに遊ぼうとしていた子供達も、今では声かけしなくても「帰ったらまず宿題」が習慣付いた。

『宿題終わったらカメラ捕って来てもいい?』という言葉も習慣付いている今、子供達は近くの用水路で亀捕りに夢中です(笑)

獲ったカメ。託児の小さな子供が川へ返しています(汗)

